

研究ノート

過疎地域寺院活性へ向けた取り組み

— 先行事例から学ぶ —

河崎 俊 宏

今発表は、人口減少が益々社会問題として深まる中、寺院を取り巻く状況はより厳しさを増すものと考えられる。このような時、教師の資質向上はもとより寺院・教師のあり方がまさに問われてくる。そして寺院の護持や維持運営という面でも様々な取り組みが必要とされる。過疎地域における寺院活性化に向けた取り組みは、寺院の死活問題として大きな課題となっている。そこで、三つの先行事例を現地調査し今後の寺院、教師が活性化に向けた取り組みを模索する際の参考資料の一つとなることを願う。

はじめに

これまで、「過疎地域寺院活性に向けて」というテーマで調査研究を進めてきた。当初、過疎地域における人口の流出と寺院維持・運営における展望は、先細り感が大半を占めていた。そのような中、PTアンケート調査（所報第 四十四号報告）、教師の危機感が顕著に表れ、今のうちから自坊での取り組みが必要であると感じるが、何をすればよいのかわからないのどという戸惑いの声があることが読み取ることが出来た。また、過疎地域にある寺院は、現存する檀信徒・地域住民とのより深い関係性を模索する傾向があるのに対し、都市部の人口密集地での寺院はそれ以前

に、その地域に寺院が存在することを如何にして認知してもらおうかという取り組みを試みるという傾向が強いことが読み取れる。このことは、過疎地域寺院の深刻な問題と共に、すでに信仰生活の希薄化や人と人との関わりが極端に薄くなった都市部の人口密集地における寺院は、寺院が信仰生活と共にあるという基盤がすでに崩れており、今日の人口減少に伴う過疎地域寺院の危機的一面と共に、都市部の人口密集地での寺院も更なる深刻な危機意識を持って取り組む必要性を示し警鐘をすでに鳴らし始めていたのである。このことは、過疎地域寺院よりもすでに深刻な問題を抱えていたという事が読み取ることが出来るであろう。

過疎地域寺院活性化に向けた「意識改革」をテーマに「本宗寺院における過疎対策、寺院活性化に向けた一考察」（所報第四十五号）で、限界集落はこうして復活できる、活性化の進め方を研究発表し、発想力と実行力を学ぶことに主眼を置き、石川県羽咋市の市役所に努める公務員の取り組みを現地調査・聞き取り調査を行ったものを発表した。それが後日、テレビ等でも多く取り上げられることとなった。また、同発表では社会福祉法人が廃寺となった寺院を地域ぐるみの「社会的包括性」という視点からの取り組み事例を現地調査し、過疎地域寺院活性化における一つの考え方としての「社会的包括性」という地域と寺院との関係を立脚点とした活性化プランに繋がる取り組みが模索できるのではないかとという提案を発表としてきた。

この様に調査研究を進めて来ると、過疎地域寺院の具体策を報じる際、活性化に向けた先行事例が幾つかに分類することが出来る。

過疎地域寺院が活性化に向けて取り組む際、様々な要素を考慮し立地条件や環境、住職や寺族の目指す方向性、檀信徒、地域住民の意識など複合的な諸条件によって、どの試みや形態が合致し、模索していく上で最善であるかを判断して頂く一つの資料となればと思う。

今回、過疎地域寺院の活性化に向けた先行事例を現地調査し、次の項目に整理してみた。

- ・会場
- ・期間
- ・内容
- ・目的
- ・主催
- ・後援・協力・スポンサー
- ・広報の方法
- ・運営方法
- ・対象者
- ・特徴
- ・今後の課題

以上項目ごとに先行事例をまとめたものが次の三つである。

- 一、山間部 寺院の「オープンカフェ木音（きのこえ）」の取り組み 事例
 - 限界集落 輪島市町野町金蔵 浄土真宗 慶願寺
- 二、「七尾 山の寺の日」の取り組み 事例
 - 過疎地域 七尾山の寺地域振興会・山の寺道交会

三、「あかりのこみち」の取り組み 事例

長谷川等伯を偲ぶ六〇〇基のあかりが山の寺に灯る

以上の先行事例について現地調査を行い発表する。

一、限界集落 山間部の事例

浄土真宗 慶願寺 「寺院のオープンカフェ木の音」

石川県輪島市町野町金蔵地区 能登の里山里海 二〇一一年世界農業遺産認定

山間部の標高百メートル集落 農業、棚田・畜産業、牛

輪島市人口二八、九五三名 世帯数一二、九一七世帯（二〇一五年）

男性一三、六七二名 女性一五、二八一名

町野町金蔵地区人口 一六一名 世帯数一六〇世帯（二〇一〇年）

男性六十九名 女性九十一名

*金沢大学 日本海域研究四十四号 輪島市町野町金蔵における昭和初期～昭和四十年代（一九二〇年代後半～一九七〇年前半）の棚田と里山の利用・管理という発表がある。その中では、二〇一一年 世帯数六四世帯、人口一五六名とある。金蔵地区は一・二・三地区あるが今発表の人口用の数字は金蔵一・二・三地区を含む数字とする。金

沢大学 日本海域四四号発表の数字はその内二地区の数字と示しているものか表記・備考等が見当たらないために数字に大きな誤差が生じている。

金蔵地区は昔、金の鶴が舞い降りたとされる伝説が残る。金蔵寺という真言宗お寺を中心に栄えた地域。この集落には五ヶ寺（浄土真宗正願寺・浄土真宗正楽寺・浄土真宗慶願寺・浄土真宗圓徳寺・真言宗金蔵寺）がある。高齢率五〇％を超える過疎高齢化地区、農業人口の減少に伴う耕作地放棄の増加、限界集落。石川県金沢大学との連携によって、里山里海自然学校、水質調査、植物、水生動物等の調査、カエル類の研究等が行われている。

◎オープンカフェ木音

浄土真宗 慶願寺 開草以来六〇〇年の寺院 その渡り廊下にオープンカフェを開く。きっかけは金蔵地区毎年の町おこしイベント「金蔵万燈会」（二〇〇二年）をきっかけに、その日限定で境内にカフェを開く。そのイベントをきっかけとしてお寺でオープンカフェ木音（きのこえ）がオープン。寺院のカフェが話題性を呼ぶ。地域の金蔵団子、金蔵地区の野菜を使ったピザやカレー、ケーキと珈琲といった食事を提供。庫裡から本堂への渡り廊下を利用してテーブル、椅子を配置、前庭を眺めながらという演出。一般来客者・観光客も受け入れ、過疎地域にあるこの寺院の特徴を生かした活性化策を試みる。

オープンより約十年、現在は閑散とした状況。地域のイベントに併せて受け入れられているような状況。山間部 限界集落の寺院が活性化に試みたこの企画は、約十年と持たずに今の状況。その考えられる要素はどこにあったのであろうか。この例から私たちは過疎地域寺院活性化に向けた取り組みの際、注意しなければならない点はどこにあるのであろうか。

オープンカフェ木音から学ぶもの（個人主導型例）

- ・会場 輪島市町野町金蔵 慶願寺 寺院境内と渡り廊下
 - ・期間 寺院年中行事以外の営業
 - ・内容 地元の食材を生かした軽食喫茶
 - ・目的 過疎地域寺院の活性化と地域振興の取り組み 地元食材の活用
 - ・主催・企画者 寺院坊守さん
 - ・広報 地元報道機関、SNS
 - ・運営 坊守一人
 - ・対象者 地域住民、地域以外の同市町村住民・県外観光者・地域の金沢大学との連携によるイベント参加者対象
 - ・特徴 山間部の限界集落にあるお寺が試みたオープンカフェ
- 地産地消型 地域と特産物等を巻き込む形での試み

●今後の課題

オープン当初、お寺がカフェというこの地域には大変珍しいと反響大きかった。その興味も2～3年は人足が期待できたが、それ以降リピータが少ない、また境内の整備や維持に負担が大きくなっていくように思われる。

ほぼ一人での、営業は様々な面に影響が出てイベント併用へ移行も自然の流れか。この事例は過疎地域寺院の活性を試みる際に重要なポイントとなると考える。

二、「七尾 山の寺の日」の取り組み 事例

過疎地域 七尾市山の寺地域振興会・山の寺道交会

石川県七尾市小島町地区 通称 山の寺院群（現在十六ヶ寺）

浄土宗三ヶ寺・真言宗一ヶ寺・曹洞宗四ヶ寺・法華宗二ヶ寺・日蓮宗六ヶ寺

七尾市の人口 五五、五二三人 世帯数 二二、一七一世帯（二〇一五）

男性 二六、二八四人 女性 二九、二二九人

小島地区の人口 一、一三三人 世帯数 五五〇世帯

男性 五八一人 女性 五五二人

山の寺院群の歴史

能登半島の内浦に位置し、能登半島最大の都市。前田利家の居城小丸山城の西側。七尾は古来より天然の良港（七尾湾）、北前船など海運業盛んな町であった。七尾は七尾城主、畠山文化の影響で京都との繋がりが強く、京都の文化がダイレクトに入り商業が盛んな町衆文化が形成されていた。

一五八一年（天正九年）前田利家が小丸山城入城に際し、奥能登方面からの防御の為に浄土真宗以外の各宗派寺院を二十九ヶ寺を配置、現在十六ヶ寺現存。

（浄土宗の寺院は知恩院直末二ヶ寺・曹洞宗總持寺直末三ヶ寺、總持寺派一ヶ寺・真言宗高野山一ヶ寺・法華宗本成寺末一ヶ寺、本門法華宗妙蓮寺派一ヶ寺・日蓮宗京都本圀寺末二ヶ寺、京都立本寺末二ヶ寺、京都本法寺直末一ヶ寺）

「七尾 山の寺の日」

第三回を数える「七尾 山の寺の日」その前身には教員を定年退職した一人の元教員の熱い地域愛があつて今日に至っている。「山の寺の日」に至る前は「山の寺学」という六年間に渡る十六ヶ寺の各寺院を会場とした市民講座の催しを試みる。地域の人により地域を知ってもらい、地域全体の文化的価値を共有するという講座を毎年二回開いた。その中心的役割を果たしたのが中濱耕平氏、教員であつた中濱氏は定年退職した後、人脈を生かし、山の寺院群を紹介し関係資料を自らも作成して、各寺院の住職が講師となつて講演。そのスタイルで宗派を問わずこの地域寺院の活性化に向け取り組んだ。このことは宗門の伝道部過疎地域寺院活性化に向けたコンテンツでも紹介された。六年間で二ヶ寺、四ヶ寺の住職には理解してもらえなかつたという。「動の人と、静の人」動の人の賛同協力があつて「山の寺学」が出来たと彼はいう。二〇一三年（平成二十五）からは、「七尾 山の寺の日」と題して一日のみ限定で、山の寺院群十六ヶ寺全寺院が寺宝を公開し、各寺院で特色ある寺院行事、催事を行う「七尾 山の寺の日」を企画開催した。主催は山の寺道交会（十六ヶ寺住職の会）、七尾山の寺地域振興会（実行委員長中濱耕平・実行委員小島町二丁目壮年会々員）が主となつて地域ぐるみの地域寺院活性化に向けた取り組み組織を結成。三年目の今年は、北陸新幹線開通もあり後援、協力、スポンサーも集め行政・民間を巻き込み開催に至つた。

「七尾 山の寺の日」から学ぶもの（社会包括的組織運営例）

- ・ 会場 七尾市小島地区山の寺院群 十六ヶ寺全寺院会場
- ・ 期間 二〇一五年（平成二十七）十月二十四日（土）九時～十六時
- ・ 内容 全寺院 寺宝一斉公開 長谷川等伯関連寺宝一挙公開

寺院行事・催事開催

・目的 山の寺寺院の活性化と過疎地域の活性化を目指す。

また、地域の人々に宝の山を再認識してもらう事を目指す。

・主催 山の寺道交会 七尾山の寺地域振興会

・後援 七尾市 北国新聞社 富山新聞社 FMラジオななお

F M石川 テレビ金沢 M R O北陸放送 J R西日本

・協力 石川県七尾美術館（地元出身 長谷川等伯美術館） ・シャトルバス運行

山の寺寺院群十六ヶ寺

・スポンサー 広告企業（銀行）のと共栄信用銀行（地元企業）八社

・広報 報道各社 ポスター チラシ

旅行会社 J R西日本 J T B 北国観光

・運営 山の寺道交会 七尾山の寺地域振興会委員

・対象者 七尾市民・市民以外の県内県民・北陸三県からの来場者

関西圏からの来場者・関東圏から美術館来場者からの流れ

一、〇〇〇人の来場者

・特徴 文化的付加価値を目的とした来場者（寺宝展の他に催事）

十六ヶ寺寺宝一挙公開、長谷川等伯の影響、表千家のお茶会

日本画展、寺ヨガ、禅粥、座禅体験、仏像彫刻展、染色展、輪島塗展

能面展、写経体験、絵手紙展、地元野菜即売など

●今後の課題

今後、この「七尾 山の寺の日」を続けていくかどうかは山の寺寺院群の各住職側の気持ち次第と実行委員長は言う。

寺院・住職の意識改革がもっと必要

寺院の檀信徒協力体制を構築できる絶好のチャンス

檀信徒に檀家寺の歴史や価値を深めてもらえる絶好のチャンス

寺が栄えれば、その地域全体が栄えるという意識を継続できるか

運営委員の高齢化（平均年齢五十代後半から六十代）

三、「あかりのこみち」の取り組み 事例

灯りでつなぐ能登半島 「能登ふるさと博」

「長谷川等伯を偲ぶ六百基のあかりが山の寺に灯る」

石川県七尾市小島町山の寺寺院群

七尾市の人口、世帯数、男女別人口統計ならびに小島町の人口に関するデータは先の発表を参照（同じ地区）

第六回あかりのこみち

七尾市出身の長谷川等伯没後四百回忌法要が等伯生家菩提である日蓮宗寺本延寺（河崎俊栄住職）で行われた。

この等伯没後四百年を機に、様々な方面で等伯ブームが巻き起こり、地元行政（七尾市観光交流課）も支援し、民

間が主となって執り行われている。

『灯りでつなぐ能登半島能登ふるさと博』と名目で、「長谷川等伯を偲ぶ 六百基のあかりが山の寺に灯る」と題した今回の催しは、第六回を数え没後四百年より毎年、生家菩提寺である本延寺で行われている。

主催は山の寺院群 あかりのこみち実行委員会、主に地元ローカル「FMラジオななお」が主となって行われている。このラジオ局は、地元新聞社である北国新聞社が母体となっている。

このあかりのこみち実行委員会の委員（運営）は、小島地区の青年団（二〇代後半から四〇代）で組織されている。この組織は地域の神社祭礼に奉仕している地域住民の青年層が基盤となっている。運営費は行政の補助金とスポンサー企業が毎年支援して実行されている。

当日は、夕方より六〇〇基の行燈にあかりが灯され、山間部である山の寺という幻想的な世界が浮かび上がる。今回は三部制の構成であかりのこみちコンサートとして、シンガーソングライターのコンサート、二部では長谷川等伯を語るトークショーが行われた。等伯美術館として有名な、石川県七尾美術館の北原学芸員と地元等伯会の代表が等伯の魅力について語り、今回初めて披露される等伯の作品が美術館に展示されていることなど話は尽きることなかった。三部では、「秋の夜長のたのしくコンサート」と題して、七尾市出身で現在BSフジ「レシピ・アン」のメインMCであるバスバルトンの北川辰彦氏が歌声を披露した。毎年入場は無料、今年も本堂いっぱい三百人を超す多くの方々が秋の夜長を楽しんだ。この模様は、FMラジオななおによって放送された。

「あかりのこみち」から学ぶもの（企業主導型社会包括例）

- ・会場 七尾市小島町地区山の寺院群 長谷川等伯生家菩提寺本延寺会場
- ・期間 二〇一五年（平成二十七）九月二十七日（日）十七時三十分～二十時

- ・内容 能登ふるさと博
長谷川等伯を偲ぶ 六百基のあかりが山の寺に灯る
あかりのこみちコンサート・長谷川等伯を語るトークショウ・
秋の夜長のたのしつくコンサート
- ・目的 能登ふるさと博 長谷川等伯を偲ぶ
- ・主催 山の寺院群 あかりのこみち実行委員会
- ・後援 FMラジオなお・北国新聞社
- ・スポンサー企業 のと共栄信用金庫 地元企業数社
- ・広報 FMラジオなお 地元新聞社予告記事 ポスター チラシ
市内対象
- ・運営 山の寺院群あかりのこみち実行委員会（小島地区青年団）
- ・対象者 地域住民・市内住民 一部市外住民（毎年の参加者）
- ・特徴 毎年様々な分野の音楽・劇・舞・笛などの協演
等伯（美術館含む）に関するトークショー
リピーターが多い、五十代・六十代の来場者半数を占める
運営の青年団員が駐車場・六百基の灯り管理

●今後の課題

第六回を迎えて催しの構成面の工夫が必要。

市の助成金は、あてにしつつもなくとも出来得る運営面

地元青年団員の人数減

スポンサー広告企業・協力企業が重なってしまふ。

演出者探し（予算等の関係も含む）

運営企画が一人のFMラジオなお局員が行っている、そこから

地元の青年団への協力要請の流れである。

以上三つの過疎地域寺院を取り巻く活性化に向けた取り組みは、寺院のみならず、地域全体の活性化に向けた取り組みなど、その地域の特徴を生かし市町村や企業と連携しながら、地元の人々（地域住民・壮年会・青年団）の協力を得て、地域と人を巻き込む形など様々な事例を紹介し先行事例として現調査をまとめてみた。

まとめ

過疎地域寺院の活性化という大きなテーマは、今後の社会状況からも急送に変化し、寺院の護持・維持運営は相当厳しさを増すと考えられる。何もなすすべなく無策のまま待っていても今以上の事は何もなく、衰退あるのみ。将来は何も期待できない。

信仰の継承や広宣流布の為、日々の努力と精進は大前提として踏まえた上で、寺院の護持、維持運営という面で過疎地域人はもとより、都市部の寺院も活性化に向けての取り組みは必要不可欠であり、寺院を取り巻く環境は今後一段と厳しさを増すものと考ええる。

現在、過疎地域寺院を取り巻く環境は、いずれ都市部の寺院をも取り巻く環境となりえる。都市部の寺院は、信仰

継承の継承問題や人間関係の希薄化、寺院との関係性の希薄化によって悪化する加速度は早いと考えられる。つまり過疎地域寺院が先にこのような状況下に於いて、必死に何を為すべきかを模索している状況下であると推測できる。

今後、過疎地域寺院、都市部の寺院に於いても様々な取り組みは必要とされ、必然的に取り組みない寺院は今後の存亡をも左右する時代が、もうそこまで来ていると考えらるべきであろう。今発表は、様々な過疎地域寺院活性化に向けた様々な事例を現地調査し分類ごとに仕分けして取り上げ失敗例なども取り入れることによって、取り組み方や改善点などが皆さんが御自坊での試みの際に役立てられる事例報告の資料となれば幸いと思う。寺院の活性化を試みる時、様々な環境に応じて活性化策を奉ずるべきと筆者は考える。少しでも前に進んで試みた方々から教わることは多い。自分達に、そして寺院に応じた取り組み方を模索して頂きたいと願う。